

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 2 日現在

機関番号：31605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380848

研究課題名(和文) 異文化間非言語対人コミュニケーションの違和感と不適応

研究課題名(英文) Intercultural discomfort and maladjustment of interpersonal Nonverbal Communication

研究代表者

内藤 哲雄(Naito, Tetsuo)

福島学院大学・私立大学の部局等・教授

研究者番号：20172249

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本の大学で学ぶ外国人留学生を対象として、身ぶり、しぐさ、視線、話し方の調子などの非言語コミュニケーションで、日本と母国の特徴、両者の違いを、PAC分析と呼ばれる方法で調査した。PAC分析は自由連想項目(思いついた言葉)同士の類似の程度を調べて統計分析し、その構造のイメージを対象者本人に聞く方法である。従前の研究で、人間関係のあり方の枠組み(人間関係スキーマ)と相手との望まれる話し方(言語コミュニケーションスキーマ)が、文化によって規定されていることが明らかにされている。本研究によって、ほとんどが無意識的と考えられる非言語的対人コミュニケーションでも、文化的なスキーマの存在が明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to confirm the existence of cultural scheme of interpersonal nonverbal communication. Participants in this research were international students at Japanese university who were living in Japan. We made use of PAC (personal attitude construct) analysis. The subject was asked to associate and tell the characteristics of nonverbal communication in Japan. Also, the behaviors of making discomfort feeling. The subject was required to estimate the degree of similarity of all pairs among association items. Same procedure was done in their country. We used cluster analysis (Ward method). And we asked the subject to tell the image of each cluster. Comparisons of results among various countries revealed there are cultural schemes in interpersonal nonverbal communication as well as interpersonal relationship and verbal communication.

研究分野：臨床社会心理学

キーワード：nonverbal communication scheme cultural difference PAC analysis qualitative analysis intersubjective free association single case

1. 研究開始当初の背景

(1)本報告書の一連研究は、日本の大学で学ぶ外国人留学生を主な対象として実施してきた。彼ら留学生は、日本に居住し日本人と交流することで、母国と違う人間関係づくり、対人コミュニケーションの様式に遭遇し、違和感、戸惑い、葛藤を感じ、不適応感さえ懐くようになる。やがて、自身が体験したり、友人や知人から聞いたり、本を読んだりして獲得した、日本での対人コミュニケーションと人間関係づくりの個々の特徴は、具体的な体験内容を越えた抽象的な(認知的)枠組みとしての対人関係スキーマ、対人コミュニケーション・スキーマへと成長して行く。スキーマとは、情報処理や行動を行う際の枠組みとなるもので、通常は意識化されることなく暗黙裡に作動するが、異文化間交流などで、相手の様式に違いを感じたり、違和感をもったりする。そこで、日本との比較を通じて、自明、あるいは暗黙のうちに獲得されていた、母国での対人関係スキーマや対人コミュニケーション・スキーマの特徴にも気づくようになる。

(2)こうした筆者の対人スキーマ研究の出発点となるのは、「平成13~15年度/留学生の孤独感の個人別構造分析」において、孤立や孤独感の背後に出身国と滞在する日本での人間関係スキーマ(人間関係のあり方)の差異とそれによる対立や葛藤があることに気付いたことによる。これを受けて、「平成16~19年度/留学生の異文化間対人葛藤の個人別構造分析」に着手した。さらに、人間関係づくりとその関係維持とに密接な関わりを持つものとして、対人(言語)コミュニケーションにもスキーマが存在することに気付き、「平成23~25年度/異文化間対人コミュニケーションの葛藤と不適応」に取りかかった。これらの成果に基づいて、ほとんどが無意図的、無意識的と考えられる非言語的コミュニケーションにおいても、文化的なスキーマ(文化に規定された情報処理や行動の枠組み)が存在することを推測し明らかにしようとしてきたのが、本研究課題「平成26年~28年度/異文化間非言語対人コミュニケーションの違和感と不適応」である。

2. 研究の目的

上記のように、日本で暮らす外国人留学生を対象として、日常生活ではほとんどが無意図的、無意識的に作動すると考えられる非言語的コミュニケーションにおいてさえも、出身国である母国と滞在国の日本とでは異なり、それぞれの国に文化的なスキーマが存在すること、その違いによって留学生たちに違和感や葛藤、不適応感が生じていることを明らかにするのが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

非言語コミュニケーションに関する先行研究では、対人距離であるとか、身体接触や

視線などのように、個別の非言語行動の文化差が検討されてきた。スキーマについて多標本で(多くの調査対象者を用いて)の集団平均値で解明しようとする、対象者の民族、社会階層、地域、社会経済的地位、教育水準、性別、年齢など、多くの要因が交絡して、言語・非言語コミュニケーション・スキーマを覆ってしまう。この問題点をクリアするのに有効なのが、個人別に事例研究として分析する方法である。単一個人の事例では、個人に関連する多くの変数を取りあげることになりやすいが、他方では分析対象(ここでは非言語コミュニケーション)に関わるその個人の関連変数だけに限定することができる。それゆえ当該対象者1名がもつ「文化的な共通枠組」である非言語コミュニケーション・スキーマを析出することが容易になるといえよう。

単一個人を対象として、暗黙裡の働きを左右する潜在意識構造まで分析するのに便利なのが、筆者内藤によって開発されたPAC(パック)分析の技法である。本研究テーマにおいても有用であることは、筆者が受給した「平成16~19年度/留学生の異文化間対人葛藤の個人別構造分析」によって人々が暗黙裡に獲得している文化的<人間関係スキーマ>が、「平成23~25年度/異文化間対人コミュニケーションの葛藤と不適応」によって<言語コミュニケーション・スキーマ>が、それぞれに存在することを実証できたことによって窺える。本報告の研究では、上記のような背景を受けて、留学生の出身国や日本の非言語対人コミュニケーション・スキーマをPAC分析で析出し、それらの結果を比較検討しようとするものである。

筆者が本研究で利用されるPAC分析の開発に着手したのは平成3(1991)年で、それから26年の月日が流れている。今では、実証技法としてPAC分析を取り入れたものが、卒業論文、修士論文だけでなく、博士論文でも珍しくなくなっている。利用分野は心理学だけでなく、社会学、日本語教育、看護学、認知科学、建築学、農学など多様である。とくに日本語教育分野では、日本人日本語教師を中心として、海外での研究もみられる。筆者自身も、本報告書の「主な発表論文等」の欄で掲載しているものも含めて海外での発表を続けている。2014年には、対立しがちな「質」と「量」の方法論を統合する国際的な学会組織Mixed Methods International Research Association(MMIRA)が設立され、同年に第1回目の国際大会(MMIRA 2014 Conference)がBoston Collegeにおいて開催された。この大会で筆者は”Analyses of Personal Attitude Construct on the Difference of Scheme of Communication Style between Japanese and Chinese.”を発表した。また、2016年に横浜で開催された第31回心理学国際会議では、「方法と統計(Methodology and Statistics)」部門での招

待講演として、“ Analysis of Personal Attitude Construct for Diagnosing Single Cases Operationally, Qualitatively and Quantitatively.”の発表をした。PAC分析の理論と技法が国際的に認知されてきていることを示すものである。

4. 研究成果

本報告書は、平成26年度～平成28年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「異文化間非言語対人コミュニケーションの違和感と不適応」（課題番号26380848）による一連の研究成果（5. 主な発表論文等、参照）の概要をまとめたものである。

本課題では、中国人、メキシコ人、ポーランド人、イラク人、インド人、スリランカ人、ベトナム人、トルコ人を対象として検討した。日本人の非言語コミュニケーションの一般的な特徴としては、目を合わせず（目を合わせることに本心を探るのに有効とされているのに）、そして何度もお辞儀するなど丁寧に謙遜した対応をして、意見よりも感情を受容するための（首を振っての）頷きがしばしば見られ、また声の調子などの準言語においても自己主張的ではなく、意味不明で多義的な（肯定と否定のどちらともとれるような）応答の仕方をする。直截な表現を避け、気遣いをみせるが、外部から観察できる顔の表情などの非言語行動と、心の中で考えている本音が違っていることを感じさせる。コミュニケーションでの言語においても非言語においても、伝えていることが曖昧で、状況や文脈から読み取ることが難しく、どこまでその日本人と関わったらいいいのかわからない。

たとえば、メキシコ人同士では、他人の感情に配慮せず、公的な場面では形式を配慮するけれども、いわゆる空気を読んで周りに合わせるができない。また韓国人では、自己主張的で、外観を気にせず、声の調子などで情動や感情をあらわにし、身体接触したり、見つめたりして相手を説得しようとするのと対照的である。ところで、トルコ人は見る方も見られる方も緊張するアイコンタクトを避ける点で日本人と似ている。

上記の一連の成果は、人間関係だけでなく、さらにはその関係づくりや維持と密接にかかわる言語的コミュニケーションにとどまらず、ほとんどが無意識に遂行されるとみなされている非言語的対人コミュニケーションにおいても、戦略的・道具的な機能を持つ暗黙の文化的スキーマが存在することを示すものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

Naito, Tetsuo Analysis of Personal Attitude Construct for Diagnosing Single Cases Operationally, Qualitatively and Quantitatively. PAC分析学会, PAC分析研究第1巻第1号, 2-12. (2017年3月)

〔学会発表〕（計10件）

Naito, Tetsuo Analyses of Personal Attitude Construct on the Difference of Scheme of Nonverbal Communication Style between Japanese and Korean. (EFPA: European Federation of Psychologists' Associations) The 14th European Congress of Psychology (Final Program), 47. (9, July, 2015) 査読あり

Naito, Tetsuo Analysis of Personal Attitude Construct on Characteristics of Japanese Nonverbal Communication: Scheme Acquired by the Korean International Student. American Psychological Association 2015 Annual Convention (Program), 255. (7, August 2015) 査読あり

Naito, Tetsuo Analyses of Personal Attitude Construct on the Difference of Scheme of Nonverbal Communication Style between Japanese and Chinese. Asian Association of Social Psychology. The 11th Biennial Conference of Asian Social Psychology, Program Book, 60. (22, August 2015) 査読あり

Naito, Tetsuo Analysis of Personal Attitude Construct on the Scheme of Mexican Which was Perceived by Japanese Exchange Student. The 31st International Congress of Psychology (Program), 213. (28, July 2016) 査読あり

Naito, Tetsuo Analysis of Personal Attitude Construct for Diagnosing Single Cases Operationally, Qualitatively and Quantitatively. The 31st International Congress of Psychology (Program), 73. (29, July 2016) (Invited Address: 大会からの招待講演) Scientific Program: Methodology and Statistics

Naito, Tetsuo Analysis of Personal Attitude Construct on the Nonverbal Communication Style of Japanese Which was Perceived by a Polish Exchange Student. International Association for Cross-Cultural Psychology, 23rd International Congress (Program), 83. (2 August 2016) 査読あり

Naito, Tetsuo Analysis of Personal Attitude Construct on Characteristics of Japanese Nonverbal Communication Which were Perceived by an International Student. American Psychological Association 2016 Annual Convention (Program), 321. (5, August 2016) 査読あり

Naito, Tetsuo Analysis of Personal Attitude Construct on Discomfort against Japanese Nonverbal-communication Which was Perceived by an Iraqi Student. *Australian Psychological Society, 2016 APS Congress (Program), 48. (14 September 2016)* 査読あり

内藤哲雄 スリランカ人の非言語コミュニケーションのPAC分析 日本応用心理学会第83回大会発表論文集, 71. (2016年9月)

Naito, Tetsuo Analyses of Personal Attitude Construct on Similarities and Differences of NVC between Japanese and Vietnamese. (*EFPA: European Federation of Psychologists' Associations*) *The 15th European Congress of Psychology. (AMSTERDAM, 11-14, July, 2017)* 査読済み (受理)

6. 研究組織(合計1名)

(1) 研究代表者

内藤哲雄 (Naito, Tetsuo)
福島学院大学・福祉学部・教授
研究者番号: 20172249

(2) 研究分担者(0名)

(3) 連携研究者(0名)

(4) 研究協力者(0名)